

俳句自動生成ツール活用によるコンクール応募に向けた補助手段の活動事例 ～積極的社会的参加に向けた取り組み～

樋井 一宏

学校の概要と対象生徒について

本実践の対象生徒は概ね発語によるコミュニケーションが成立し、指示理解も可能な生徒達である。一方でこれまでの生育歴、学習経験などから自信がなく学習に対して前向きな気持ちを持ちにくかったり、苦手意識から文章を書いたり発表したりといった自己表現が苦手な生徒達である。自信の無さから気後れしてしまっている場面が多い生徒達である。そこで、彼らの知識欲を刺激する課題を設定し、補助ツールの活用を取り入れることで自信を持って活動し、のびのびと表現できることを経験させたいと考えた。また、中学部という学齢を考慮して、「社会とのつながり」が意識でき、将来の積極的な社会的参加を促すような学習活動を取り入れたいと考え、本実践を行うこととした。

実践のねらいとその流れについて

本実践のねらいは大きく3点である。まず1つは「俳句」による自己表現である。生徒たちは先述の通り自己表現に対して消極的になりがちである。特に皆の前で発表する、作文を書くといったことには強い抵抗感を示す。発表の活動についてはこれまで「自立活動」の授業でプレゼンテーションソフト等を補助手段に用いる活動を行ってきた。一方で「書くこと」については他教科でも苦手意識から忌避しがちである。特に「こんなに書かれへんわ」と原稿用紙を見ただけで抵抗感を持ってしまうことがほとんどであった。つまり、彼らにとっては「文字数」ということに端を発した苦手意識があることがうかがえた。そこで、17音で構成される「俳句」を取り上げることとした。「俳句」という表現形式は、限られた文字数の中で表現しきる難しさがある一方でその文字数の少なさから先述の苦手意識を緩和できるというメリットがある。また、現行学習指導要領において重要視される「伝統文化」を学ぶことにもつながると考え取り上げることとした。

2つ目は「補助手段の活用」である。今回は「俳句自動生成プログラム」を使用した。これはインターネット上に公開されているフリープログラムで事前に登録された語彙からランダムに5音7音5音の組み合わせを作りだしてくれるものである。(参考：<http://jhaiku.com/>) 生徒たちの「書くこと」への苦手意識の原因として生活、学習両面の経験の不足からくる語彙の少なさが考えられる。また、「読み」の困難さもあり従来の辞書や歳時記から目的の語彙を探し出すことも難しい。そこでこの俳句自動生成プログラムを活用することで「言いたいけれど何と云えば良いかわからない」を解消することができるのではないかと考えた。そして、この経験から「苦手なこと」は一人で悩まずとも代替手段を活用して乗り越えればよいという経験をしてほしかったのである。この先いろいろな困難が予想される子どもたちである。その時にうまくツールを活用できる力を持つことで生活を豊かにすることが可能ではないかと考えた。

3点目は俳句コンクール応募による余暇活動の広がりや積極的社会的参加である。コンクール応募によって表現の対象を意識させると共に、「自分たちも参加できる」という実感を持ってもらいたかったのである。本校でも「障がいのある方」を対象としたコンクールの案内は多く、授業等でも参加する機会が多い。しかし、実際には応募要項などは教員が記

入し出展することがほとんどであり、実情は「気づいたら参加していた」あるいは「参加していたことも知らなかった」となってしまうことがほとんどである。それでは将来彼らが学校を出た後、自分からコンクールに参加することは難しい。また、「障がいのある方」向けのコンクールよりも一般公募のコンクールの方が、数が多いのは自明である。可能性を広げる、自分で参加するための情報を集めるという点に重点を置いて活動を組織した。今回の実践では応募先のコンクールとして伊藤園主催の「おーいお茶新俳句大賞」を選んだ。理由は、受賞作品がペットボトルのラベルになっており、子どもたちも目にした事があり身近なものであると考えたからである。この実践を機に身近な「俳句」に目を向け興味を持ち、今後余暇の選択肢としてくれることを考え設定した。授業の流れは以下の通りである。

		テーマ	主な活動内容	ねらい
第1次	1時	コンクールについて知ろう	「おーいお茶新俳句大賞」について知り、応募要項を書いてみる。	<ul style="list-style-type: none"> ・コンクールについて知り自分も参加できるという気持ちを持つ ・必要な情報を収集することができる。
	2時	俳句の基礎知識	俳句の基礎知識（音数、季語など）名句から学ぶ（季節分け）	<ul style="list-style-type: none"> ・俳句の基礎的な規則について知る ・先人の作品を読みイメージをつかむ ・季語に着目することができる
第2次	1時	俳句を作ってみよう	自力での俳句作成	<ul style="list-style-type: none"> ・季語となる言葉を多く出すことができる。 ・俳句作りに挑戦できる
	2時	自動生成ツールの活用	俳句自動生成プログラムの活用	<ul style="list-style-type: none"> ・補助手段を活用することができる

実践の様子

(1) 第1次 1時

本時は「おーいお茶新俳句大賞」の説明から始めた。まずは前年の受賞作品の印刷されたペットボトルを見せ、生徒達にこのコンクールについて知っているかを確認した。生徒たちはほとんどが見たことはあるもののその内容にまでは意識が向いていなかったようだった。そこで、コンクールの概略を説明し、本単元の最後には応募することを告げた。すると、生徒達からは「そんなん俺らには無理やし」と言った否定的な発言がいくつか出た。ここに彼らの自信の無さが端的に表れていた。そこで昨年の受賞例から自分たちより年下の小学生部門、同じ年ごろの中学生部門の受賞作品を見せた。すると「すごい・・・俺らにもできるかも」といった前向きな発言も見られた。一方で「でも、無理やろ」という発言もあった。そこで、単元の最後には「秘密のツール（俳句自動生成プログラム）も

使うから」と予告を行った。その後、iPadを使って「おーいお茶新俳句大賞」の募集要綱を探すことを課題とした。生徒たちはインターネットに接続し、各々がキーワードを入力し探していった。この検索という活動がICT活用の重要な要素であると考えている。今やインターネットは各家庭に普及し、誰もが自由に使うことができる。しかし、必要な情報にアクセスするには「検索力」というものが必要である。この知りたいことを知るための技能の獲得こそがメディアリテラシーの重要な柱であると考えている。そこであえて検索ワードはこちらから指定せず、子どもたち自身に考えてもらった。「伊藤園」や「俳句」「おーいお茶」といったワードを組み合わせて各自が検索を行った。ある程度検索が進んだ段階で大型モニターに指導者が該当ホームページを提示し確認した。全員がそのホームページにたどり着くことができた。そこから本年度の募集要項のページを表示させ内容を確認した。応募部門や入選作数、賞品などを質問し、それぞれが検索結果から答える形で情報収集を行った。その後、自分たちが応募すべき部門を確認し、事前に印刷しておいた応募用紙を配布し記入していった。記入の際わからないことは自分たちから質問したり、生徒同士が教え合ったりする姿が見られ意欲が高まっていることが確認できた。同世代の入賞例やペットボトルという身近なものに印刷されるかもしれないという期待が高まったものと考えられる。

(2) 第1次2時

この時間では、俳句の音韻数や季語といった基本的な知識を確認した。昨年度の受賞作品を例にとり、音数を確認し5・7・5の17音で構成されていること、読むと季節がわかりそれは「季語」に由来することを読み取り活動の中で確認していった。予想通り子どもたちは「たった17文字なん？これならできそう」という文字数の少なさから抵抗を感じず課題に取り組めそうな反応を示してくれた。

その後、中学校国語の教科書に採択されている近現代の俳句の中から季語を見つけやすい句をピックアップしたプリントを配布し、個人活動でそれぞれの句の季節と季語を探す活動を行った。最後には皆で答えを確認し合った。普段グループの中でも自信の無さから活動に消極的で苦手な課題は離席なども見られる生徒Aも予め自分の答えが合っているかをこっそり教員に確認したうえで皆の前で発表することができたのは大きな収穫であった。

(3) 第2次1時

この時間は、「春」の俳句を作る活動を行った。授業開始時に前時学習した俳句の決りを確認したうえで、まずは季語となりそうな語句を出し合った。手順としてはプリントを用いて個別学習として「春」から連想される語句をブレインストーミングの要領で書きだした。書くことが難しい生徒は教員が寄り添い、口頭で挙げたものを教員が代筆した。そのうえで、書いたものを順番に発表し合い、教員が教室のホワイトボードに板書し共有した。それを受けてプリントに自分のこの春の出来事や思いを基に俳句作りを行った。わからないところは個別に教員が質問に答える形で補助し多い生徒で3句を作ることができた。しかし、語彙の不足から途中までで終わってしまう生徒も居た。

(4) 第2次2時

この時間は前回の活動を振り返った後、「俳句自動生成プログラム」を紹介した。そしてその使い方を説明したのち、これをお助けツールとして使っていいということにして俳句作成の続きを行った。条件として「途中まで作って言葉が浮かばないとき」使用するようにと指示してから活動に入った。活動を進める中で生徒Bからこの授業の本質にかかわる質問が出た。この生徒は前回の授業でも3句を作った生徒である。質問の内容は「このツール絶対使わなあかんの？」というものであった。この質問こそがICT機器を含む補助ツールと子どもたちとのかかわり方の原則である。つまり「補助ツール」はあくまで自分の目の前の色々な困難を自覚した時、自身を助ける目的で使うものである。この原点を見事に指摘した質問であった。彼らはそのまじめさゆえに「ねばならない」といった思考に陥りやすい。しかしICTを含む補助手段は「使うこともできる」ものである。この点について生徒たちに伝えるため、一時活動を中止しその点について子どもたちに伝えた。生徒Bの質問によって先述の本単元のねらいの2つ目を伝えることができたものと考えている。

また前出の生徒Aは時間内に作りきることができず、昼休みに筆者の教室に来てiPadの操作を続け、わからないことは質問しながら2つの句を作ることができたのである。最後まであきらめず作り上げられたことは自信につながったはずである。これにより、全員が2句以上の俳句を作ることができたのである。

まとめ

今回の実践の成果と課題をまとめる。まず「俳句」という表現活動についてである。今回の取り組みを通じて全ての生徒が俳句を作ることができた。普段、作文等の書く活動では消極的になりがちな生徒達であっても文字数が少なくなることで抵抗感なく取り組むことができ、「書く」ことに苦手意識のある生徒にとっては有効な表現手段の一つとなりうることが証明できた。また、彼らは苦手意識から「長文を書く」ことに抵抗はあっても表現したい内容をしっかり持っていることも証明できたものと考えている。日々の生活やいろいろな経験を言語化し表出し仲間と共有できる喜びを感じることで成長につながるものと信じている。その中で彼らの表現しにくさの要因の一つである「語彙」については日々の生活や学習の中で充実させていくことと同時に補助ツールを使用することで補うことができることも証明された。また、その活動を通して生徒達自身から補助ツールとの付き合い方について示唆的な発言があったことは重要である。障がい者差別解消法により公的機関での合理的配慮が義務付けられ、今後社会的にも彼らの困難さに対する理解は広がるようになるものと考えている。その中で生きる上で彼ら自身が自分の苦手と向き合い、その苦手をサポートする手段を身につけていくことが重要である。それは環境が与えてくれるものだけでなく、自ら選択し使いこなしていく力が必要であるとも言い換えられる。その一端を経験することができたのではないだろうか。そしてコンクール応募という明確な目標を持つことで活動に意欲的に取り組めた。それだけでなく、「自分も応募できる」「応募してみたい」という気持ちと経験が、将来の生活の中で積極的に社会に関心を持ち、自ら関わりを作っていく土台となることを願っている。

課題として表現活動の充実と拡張が必要である。今回の単元だけで終わりではなく季節

やテーマを変えて俳句を作ってみること、俳句以外の表現方法として詩や散文、報告書などの実用文への拡張のあり方も考えていかなければならない。また、今回 ICT 機器を活用して活動を行ったが、ICT 機器活用においては先述のメディアリテラシーを身につけていくと共にネットモラルや情報を客観的批判的に見る力の養成も重要である。それらの点について知識はもちろん、体験的に学べるような学習活動を今後計画していかなければならないと考えている。